

して貴族院議員小松原英太郎が文部大臣に就任するや、小松原は同じく貴族院議員で日本美術協会幹部の下条桂谷、平山成信、武井守正、馬屋原彰、谷森真男らと相談の上、突如文展審査委員に正派同志会の高島北海、望月金鳳、益頭峻南、荒木十畝、山岡米華らと野村文孝の六名を加えることを発表したのである。これは正木直彦や福原鎌二郎ら従来の選考委員を全く無視した一方的な決定であった。当然のことながら国画玉成会はこれに憤激し、文展と期を同じくして別に竹の台陳列館で日本絵画展覧会を開いた。文展には正派同志会と京都派の画家が出品し、京都派の竹内栖鳳筆「飼はれたる猿と兎」山元春拳筆「雪松図」や川合玉堂の「秋山遊鹿」などが好評を博す一方、旧派大家の作は評判が悪かった。国画玉成会展の方は安田鞞彦筆「守屋大連」下村観山筆「大原御幸絵巻」などが注目を集めた。川端玉章、寺崎広業、川合玉堂らは文展と国画玉成会の両方に出品した。

西洋画、彫刻の部門ではこのような分裂はなかったが、裸体彫刻は風教上問題があるので特別室に陳列して一般の目には触れさせないという措置がとられ、新海竹太郎の「ふたり」、石川確治の「花の雫」、建島大夢の「閑静」が特別室入りとなった。西洋画で好評を博したのは和田三造の「焔燻」、吉田博の「雨後の夕」、中川八郎の「北国の冬」、山本森之助の「漁村の遠望」、鹿子木孟郎の「ノルマンディーの浜辺」、橋本邦助の「水のはとり」等々で、彫刻では萩原守衛の「文覚」、新海竹太郎の「ふたり」、朝倉文夫の「闇」、米原雲海の「寒山子」、山崎朝雲の「大葉子」等々であった。

なお、本校関係者（現職教官、卒業生、生徒）の出品（入選）状況

は凡そ次のとおりであった。

文展

（日本画）川端玉章、寺崎広業、戸田天波、渡辺萊渚

（西洋画）黒田清輝、岡田三郎助、和田英作、小林万吾、中沢弘

光、山下繁雄、跡見泰、岡吉枝、中野營三、五島健三、和田

三造、郡司卯之助、長谷川昇、倉田白羊、辻永、田辺至、中

村勝治郎、出口清三郎、赤松麟作、加藤静児、橋本邦助、長

原孝太郎、山本森之助、熊谷守一、渡辺省三、湯浅一郎、斎

藤五百枝 出品総数の約26%。

（彫刻）白井雨山、水谷鉄也、中村直彦、山崎和沾、青木外吉、

芦野廣、藤井浩祐、朝倉文夫、毛利教武、石川確治、小倉右

一郎、北村西望、杉本伝、建島大夢、吉田祥三、内藤伸、宮

原常二郎 出品総数の約60%。

国画玉成会展

川端玉章、寺崎広業、本多天城、木村武山、下村観山、横山

大観、勝田蕉琴、山脇荷声

⑩ 橋本雅邦死去

明治四十一年一月十三日、もと教授橋本雅邦が死去した。雅邦は本校創設以来絵画教育の指導にあたり、明治三十一年春、岡倉覚三の校長辞任の際にともに辞職して日本美術院を創設。以来同院主幹（同三十九年まで）として後進の指導につとめ、同四十年文展開設の際には審査委員に挙げられた。

葬儀は一月十六日深川壺岸町の浄心寺で執行され、門下生総代川

合玉堂、本校校長正木直彦、本校校友會總代白浜徹、日本美術院總代紀淑雄、日本画會總代荒木十畝、京都高等工芸学校長中沢岩太(代理)、二葉會總代山脇荷声らの弔辭朗讀があった。

雅邦歿後間もなく本校構内に銅像を建設する計画が起こり、四十年夏に白井雨山、屋代鉞三が中心となって卒業生から資金を集め、大正三年に至り、白井雨山原型、原安民鑄造の銅像(胸像)を本校構内に建設した。一方、岡倉覚三らは雅邦の功績を記念するために美術學院を設立した。『美術新報』第六卷第二十号(四十一年一月五日)は雅邦追悼の記事と併せてこの美術學院に関する次の記事を掲げている。

○美術學院の設立 日本畫界の耆宿橋本雅邦翁が日本美術の振興を圖り其精粹を發揮せん事に一意腐心せるに同情し岡倉覺三氏其他同志者相謀りて美術學院を設立する事とし、美術に關する學理と藝術との攻究、育英、獎勵、講演及鑑識力の養成等に努め且其一部を割きて雅邦翁の爲に紀念的會堂を建設し、一は雅邦翁の宿志を果たし、一には日本美術の發展を期し、兼ねて國民の趣味性を涵養することに努むる由。而して是等諸事業中最も緊要にして且其本旨たる有望美術家養成に就ては、已に育英部を開き、主任に紀淑雄氏を擧げ、人選、指導等一切の事を委囑したるが、今回愈々畫家側の第一期研究生として安田靉彦、橋本永邦の二氏を選定し、安田氏には天武朝以降の古畫を歴史的に研究せしむ可く、舊臘奈良地方に出張せしめ、橋本氏には尙當分當地に在りて所期の研究に従事せしむる事とせり。此研究生と云へるは美術學院よ

り毎月生活費を給して、研究に餘念なからしめ、以て其特長を大成せしむべきものにて、其第一期としては前記の二氏選ばれたるも、第二期よりは漸次彫刻、圖按等の方面よりも俊才を選出する筈なり。尙同院は今年夏季を期し、本邦美術の發現地たる奈良に於て先づ第一回美術講演會を開き、南都の美術に就き、各専門名家に指導的講演を請い、志望の向には隨意聽講を許すべしと云ふ。

文中の講演(習)會の第一回は四十一年七月二十日から二十九日まで奈良県立高等女学校で開かれた。

明治四十三年二月には上野公園美術協會列品館に於いて雅邦遺墨展覽會が開かれ、併せて門人の団体である二葉會展覽會も開かれた。また、この年より翌四十四年にかけて原安民は二葉會の依頼により『雅邦集』全三卷を編集し、日本美術社から発行した。

なお、雅邦の死去に際して『東京美術学校校友會月報』第六卷第六号の表紙に雅邦の肖像写真が掲げられ、追悼と略歴紹介の記事が掲載された。